

天使たちの課外活動4

アンヌの野兔

茅田砂胡

Sunako Kayata

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 鈴木理華

1

食事の誘いは嬉しいものだ。

気心の知れた親しい相手ならなおさらである。

しかし、時にはあまり好ましくない誘いもある。

楽しいはずの席が単なる義務と化すこともある。緊張と苦痛を強いられる場となることもある。

「たまには一緒に食事でもしないか？」

この短い通信文を見た時にダン・マクスウエルは以上のことを瞬時に考えた。

食事はいい。

問題は一緒に食べる相手だ。

ダンは未だに自分の両親を苦手としている。

正しく言えば、つき合い方を掴みかねている。

母親だけならともかく、父親が出てくると、正直、

どう対応したらいいかわからないのだ。

半世紀前、共和宇宙にその名を轟かせた海賊王が自分の実の父親だという時点でもう目眩がするのとどめに一度死んだ人ときている。

そういう人と平気でつきあえるほど図太い神経の持ち合わせは自分にはない。

が、それではこの通信文の送り主——実の母親が引き下がらないのもわかつている。

「食事というのは——連邦大学ですか？」

悩んだ末に尋ねると、すぐに返事が返ってきた。

「だから誘った。いい店を知ってるんだ」

ダン・マクスウエルは過密な予定の合間を縫って、なるべく連邦大学惑星に立ち寄るようにしている。

一人息子のジェームスに会うためだ。

共和宇宙を辺境まで飛び回る多忙なダンが息子に会えるのは年に数えるほどだ。しかし、小さかったジェームスも今ではもう十四歳になる。友達も多く、充実した学園生活を送っていて、父親に会えるのは

その程度でちよいどいいらしい。

今回、ダンは少し長い滞在を予定していた。

連邦大学惑星事務局から講演を頼まれたからだ。

なるべくその手の依頼は断るようになっているが、息子が在籍している惑星から熱心に頼まれたのでは断りにくく、大学側としても、辺境最速で知られる船長の講演なら十分に学生に聞かせる値打ちがある。

大学生相手の講演なので残念ながらジェームスは受講できないが、息子も父親の名誉を大いに自慢に思っており、ぜひ引き受けてほしいと言っている。

さらに、その講演は午前中に予定されている。

そんなわけで、ダンは悩んだ末に返事を出した。

「——昼食でよければ、おつきあいしましょう」

夜の食事は正直まだちよつと……荷が重いのだ。

昼食ならさほど深刻な雰囲気にならずに済む——

同時に両親の酒の肴さかなにされる（平たくいえば玩具おもちゃにされる）可能性も軽減するはずと踏んだのである。

大学側が講演用に用意したのは千人も入る講堂で、

ダンは半分も埋まらないのではないかと危ぶんだが、蓋ふたを開けてみたらほとんど空席がなかった。

著名な船長の体験談じかが直に聞けるとあって、航宙科からは将来の機関士や航宙士を目指す学生が大勢やってきた。宇宙船を設計する分野からも船舶工学、宇宙技術環境学を専攻する学生が集まった。

講演は定刻通りに終わつたものの、その後の質疑応答でダンは学生たちから質問攻めにされ、出るに
出られなくなつてしまつたのである。

焦あせつて「遅れそうなので先に始めてください」と質疑応答の合間に連絡したが、「待つてる」と返信されてしまつた。

結局、一時間近くも彼らの質問に答えて、ダンはやつと待ち合わせ場所に向かうことができた。

待ち合わせ場所は大学から徒歩でも数分の近所で、広い通りに面したカフェだった。

学生の街なので、やはり若い客が多い。

そんな中、その二人は非常に目立っていた。

決して他の客たちを威圧いあつしているわけではない。

二人ともその辺は実に巧みだった。周囲にうまく溶け込んで大人しくしている。だから他の客も気に留めずにくつろいでいるが、ダンはため息を吐いた。

どう間違っても、今年四十五歳になるダンの実の両親には見えなかったからだ。

むしろダンが最年長者である。

この人たちが年相応の外見だったなら、もう少し親子らしい関係を築けていただろうかと、ちらっと思ったが……それはそれで怖いような気もする。

「……お待たせしました」

このまま帰りたい気持ちを抑えて声を掛けると、ジャスミンは待ちくたびれた様子で立ち上がった。

「遅いぞ。腹の皮が背中にくっつきそうだ」

「だから先に食べていてくれと言ったでしょう」

店の場所なら地図を送ってくればよかったのに、ジャスミンは『三人一緒』にこだわったらしい。

ケリーが笑って言った。

「急がないと本当に食いつばぐれるぞ」

大柄おおがらな二人がダンを案内したのは大通りを入った閑静かんせいな住宅街だった。

しかし、まったくの住宅ばかりではない。

敷地から溢あふれる緑が目立つ家屋を使った骨董店や古びた看板の個人医院などが混在する通りである。

昔ながらの時代を感じさせる通りの途中に、その飲食店もあった。

昼の営業時間もそろそろ終わりに近いはずなのに、まだ短い列ができている。

人気のある店なのだろう。幸い回転は早いようで、三人はそれほど待たずに店内に案内された。

「いらっしやいませ」

彼らを迎えたのは若い女性の給仕係だった。

明るくはじけるような笑顔ときびきびした動きが見ている気持ちのいい人だ。

店内もこざっぱりと落ち着いた装飾で、居心地のよさそうな雰囲気かみを醸し出している。

三人が案内されたのは入ってすぐ左側の席だ。席に着く前、ジャスマンは店内の目立つところに飾られた写真に眼を留めた。

給仕服を着た中年女性の写真だった。

ジャスマンはその写真に向かって静かに目礼し、三人の注文を取っていた給仕係の女性が見て話しかけてきた。

「——義母ははをご存じなんですか？」

「ええ。前に一度。——お嬢さんですか？」

「いいえ。わたしは嫁なんです」

軽い驚きを見せたジャスマンに、学生と言っても通りそうな給仕係ははにかんだような笑顔を向けた。

「わたしは一度も義母に会えなかつたものですから……お客さまから義母の話うかがを伺っているんです」

彼女はジャスマンに興味を持ったようだが、まだ忙しい時間帯である。無駄話をしてる暇はない。

手際よく献立メニューを説明した。

「——今日の昼食ランチは海老えびを使った星陵スターネトル麵めん、甘辛あまからく

煮付けた赤斑魚の定食、魚介の熱いソースで食べる蒸し野菜の一皿、ミヨール豚ぶたの生姜ソテーしょうがです」

「取りあえず全部」

とジャスマンは答えて、ダンを見た。

「おまえは何にする？」

「……どのくらい食べる気ですか？」

「自分で言うのも何だが、わたしのこの身体だぞ。

消費する量が多いのは当然だろうが。この料理は美味しいからな。何を頼んでも外れなしだ」

ジャスマンは笑顔で給仕係を見た。

「他の料理も注文できるのかな？」

「——はい。できますけど……」

戸惑いを見せる給仕係の女性を安心させるように笑いかけたのはケリーだった。

「大丈夫だ。余らないから」

夫婦二人は他にもいろいろと料理を頼み、ダンも豚の生姜ソテーと蒸し野菜の一皿を頼んだ。

宇宙船暮らしが長いので新鮮な野菜に惹かれるが、

野菜だけでは腹がもたない。こういう野菜を使った料理は若い女性向けに量は控えめなことが多いから、二人分でも食べきれると判断してのことだった。

注文を済ませた後、ダンも何気なく店内を見渡し、さりげなく壁に飾られた絵に気がついた。

ふさふさした毛皮も、足を止めているのに今にも飛び跳ねそうな躍動感も見事に描かれた兎うさぎの絵だ。

「モリエンテスの野兎ですね」

ジャスマンが感心した顔になる。

「よく知ってるな？」

「運んだことがあるんです。——本物を」

今度はケリーが驚いた顔になった。

「おまえ、美術品輸送免許なんか持ってたか？」

「取ったんです。幸いわたしの船は条件に該当していませんので」

美術品の——その中でも文化財扱いされる貴重な美術品の輸送には厳密な規定が設けられている。

速度、船体強度、船室内の温度湿度などの管理は

もちろんのこと事故履歴りれきも考慮され、諸々の条件を満たした船と乗組員でないと許可が下りない。美術品の値打ちが高くなればなるほど運送担当の条件も厳しくなるが、そうしたものを運んだという実績は自分の信用にもつながり、結果的に利になるのだ。

ダンは奇くしくも、つい先程、講演で話したことを両親にも説明する羽目になったのである。

「——中央座標セントラルの連邦中央美術館に収蔵されている『野兎』がエストリアの国営美術館に貸し出された時のことです。連邦美術館でも『目玉』の作品ですからね、エストリアと中央座標セントラルの間で微びに入り細にわたり、貸し出しに関する条件が決められました。

返却期日と方法はその最たるものでしたよ」

貸し出し時及び返却時には中央座標セントラルから学芸員キュレーターが外向き、その立ち会いの下で梱包こんぱうすること、行きも帰りも学芸員キュレーターが同行すること、返却時は絵を積んだエストリアの船が中央座標セントラルの宇宙港に入り、そこで待機している中央美術館の人間に絵を引き渡すこと、

中央美術館の人間が異常がないことを確認した上で受け取りの書類に署名した時点をもって返却完了とみなすこと——等々だ。

もちろん、一日でも返却が遅れたらエストリアは中央座標に莫大な違約金を支払うものとするという項目がしっかり記された。

「ずいぶん嚴重だな」

ケリーは呆れていたが、この種のことに関しては夫より詳しいジャスマンが真顔で反論した。

「当たり前だ。モリエンテスの『野兎』だぞ。貸し出し中に万一のことがあったら取り返しがつかん」

「美術は専門外なんだよ、俺は」

厳しい妻にケリーは苦笑している。

ダンも珍しく、自分より若い父親に同感だったが、そうは言わずに曖昧に笑った。

「わたしも知らなかったんですが、オークションに出せば最低価格が五十億という品のようですからね。いくら嚴重にしてもすぎることはないでしょう。

あんな小さな絵なのに、船に運ばれてきた時は何の貨物かと思うくらい大きな箱に入っていましたから。衝撃から絵を守るための保管庫だそうです」

「宇宙空間を運ぶなら当然だな。仮に船が沈んでも絵だけは守ろうというわけだ」

「ええ。事実その通りのことを、面と向かって学芸員に言われましたよ。『自殺なら一人でやってくれ、この絵を巻き込むな!』とね」

「自殺?」

二人は首を傾げ、ダンは苦笑しつつ説明した。

「そもそも何故、美術品輸送に関しては経験の浅いわたしがあの絵を運ぶことになったのかと言うと、エストリア国営美術館が絵を返却しようとした際に問題が生じたからなんです」

滅多にないことだが、エストリア星系の広範囲で強い磁気嵐と太陽風が発生したのだ。

幸い、大気圏が惑星を守り、地上の人々に危険が及ぶことはなかったが、宇宙船はそうはいかない。

地上の天気例えなら雷鳴轟く暴風雨である。

こんな宇宙に乗り出したら難破は免れない。

昨今の宇宙船は多少の悪条件にも対応できるよう設計されているが、何事にも限度があるのだ。

第一級警報が発令され、エストリアの全宇宙港が閉鎖される緊急事態となったのである。

「通常、あれほど高価な絵の場合、返却期限にある程度の余裕を持って展示を終えるのが慣例になっているそうです。何か異常事態が起きた時——まさにこんな時のためにです」

宇宙空間を運搬する以上、当然の配慮だ。

かつての《門》のような通行止めはないとしても、宇宙では何が起こるかわからない。

シヨウ駆動機関が使えない事態となれば、惑星に閉じこめられたも同然で、事実上の通行止めになる。「ところが、エストリア国営美術館は、言わずともわかるでしょうが、ぎりぎりまで絵を展示していた。エストリアから中央座標までは極めて安定した短い

航路ですから安心しきっていたんでしょ。絵を迎えに行つた中央美術館の学芸員の忠告も無視して、一日でも長くエストリア国民にこのすばらしい絵を見せたいのだと力説した。その理念は立派ですが、返却期日が迫っているのに、彼らは気象情報さえ確認しようとしなかつたんです。そしていざ絵を返却しようという段になって、運送業者に連絡したら『今からエストリアに來い？ それは何の寝言だ』とばかりにあしらわれて、初めて危機感を持ったというわけです」

慌てて宇宙局に問い合わせるも時既に遅しだ。

惑星エストリアの周辺宙域は現在、超大型の磁気嵐に見舞われており、この嵐がいつ止むのか、いつ跳躍再開できる状態となるか、宇宙局にもまったく予測できないというのである。

エストリア国営美術館は進退窮まってしまった。嵐が終わるのを待っていたら、恐らく返却期限を過ぎてしまう。そうなれば中央美術館に莫大な違約

金を支払うだけではすまない大失態だ。エストリア
 国営美術館の国際的な信用は地に落ちる。

「国営美術館以上に、そんなことになっては国家の
 恥だと危惧したのがエストリア政府だった。

血眼になつて絵の返却手段を探すも、まともな
 輸送船には端から断られてしまい、最終的に白羽の
 矢が立てられたのがダンだったのだ。

しかし、美術品輸送を専門とする熟練船に軒並み
 断われた難物の依頼だけあつて、ダンも躊躇した。

「——現場の状況は最悪でした。エストリア星系は
 比較的広範囲の航路に跳躍可能域を儲けていますが、
 そのことごとくが跳躍不可状態。政府の許可を得て
 航路以外の場所に跳躍しようにも、そもそも惑星の
 近くにシヨウ駆動機関を使用できるだけの安定した
 宙域がない。結局、惑星エストリアから八千万キロ
 メートルも離れたところにやつとのことでは跳躍して、
 通常航行でエストリアを目指したんです」

航路を知っているケリーが呟いた。

「最低十時間は掛かるな」

「わたしの船ならもつと早いんですがね、あくまで
 宙域が安定した状態なら話です。あの時は全力を
 尽くしても二十時間掛かりました。自分で言うのも
 何ですが、他の船だったらまず諦めていたでしょう。
 やつとのことです。エストリアにたどり着いて宇宙港に
 入港を求めたところ『こんな天気にはいつたい何しに
 来た!』と真顔で詰問される有様で『宇宙港なんか
 来ないで病院に行け!』とまで言われましたよ。
 わたしの正気を疑つたようです」

ケリーはさらに呆れて言った。

「その猛烈な嵐の中を、今度は目玉が飛び出るほど
 高い絵を積んで出港したのか?」

「だからこそそのあの台詞ですよ」

ダンが言えば、ジャスマンが真顔で頷いた。

「自殺は一人でやれ。この絵を巻き込んでくれるな。

——学芸員としては至極当然の主張だな。よくまあ
 宇宙港が出港許可を出したもんだ」

「政府がもう『行け行け』の一点張りでしたからね。厄介な絵を一刻も早く出国させたかったんでしょ。返却期日にはもうぎりぎりだったんです。もちろん、船長のわたしには仕事を拒否する権限がありました。この悪条件では無事に輸送を終える保証はできない、運搬を引き受けられないと言えば、それで終わった話です。向こうも強制はできない。断ったところで罰則も発生しない。さつきも言ったように中央美術館の学芸員は『こんな状態の宇宙にこの絵を持ち出すなんて正気の沙汰じゃない!』と血相を変えていましたからね」

「それなのに出港に踏み切ったのか?」

「わたしの船なら行けると思いましたが」

さらりと放ったそれは、己の仕事に誇りと責任を持つ男の言葉だった。自分を見つめる両親の視線に氣づいて、ダンはわざと茶化す口調で続けた。

「わたしのところに持ち込まれる仕事はいつも急を要するものばかりですが、あれはきつかったですね。」

絵はいいんですよ、絵は。こつちがどこを飛ばうとどんな操船をしようと一言も文句を言いませんから。——学芸員がどうしてもこの絵から離れるわけにはいかないといい張つて強引に乗船してきましたが、これがもう大変な惨状で、最後は便器に貼りついて離れなくなりましてね」

どんな無茶な操船をしたのか、推して知るべしだ。ケリーはその光景を想像して楽しげに笑ったが、ジャスマンは心配そうに質問した。

「結果的に返却期限を守れたエストリアはともかく、連邦中央美術館はおまえが出港に踏み切ったことに不満を唱えなかったのか?」

「唱えまくりでしたよ。こんな無茶をされては困る、あの絵が無事だったからいいようなものの、万一のことがあつたらどうするつもりだったのかと猛烈に抗議されましたが、わたしの答えは変わりません。無理だと思つたら引き受けなかった、無傷の状態で届けられると判断したからこそ出港に踏み切ったと

反論させてもらいました。現実には絵は無傷で届いているのだから何の問題があるのかとね」

やれやれと肩をすくめたジャスマミンだった。

「おまえの出港を知った中央美術館は生きた心地がしなかっただろうな」

「それも言われました」

ダンはこちらより皮肉な顔で言ったものだ。

「美術館の関係者は揃って『船なんかどうなつてもかまわないからあの絵だけは！』と祈ったそうです。それを堂々と船長のわたしに言ってくるんですから——関係者には立派な経歴の学者もいたんですがね。芸術を愛するのは結構ですが、人命よりも大事とはさすがにこの人たちはどういう神経をしているのかと疑いましたよ」

「それはそんな悪天候で出港するおまえが悪い」

ジャスマミンが呆れて言い、ケリーが押揶した。

「いいじゃねえか。終わりよければすべてよしだ」

「同感ですね。エストリア国营美術館は返却期限を

守ることができ、絵は中央美術館に戻り、わたしも多額の報酬を受け取った。めでたしめでたしです。

——ただ、同行した学芸員だけは最後までお冠で、二度とこの船には乗るものかと宣言されましたが、不本意な話です。時間に余裕さえあれば、もう少し品よく飛ぶこともできたんですがね」

ダンも悪戯っぽく笑ってみせた。

「白状すると、今まで扱った積荷の中でも桁違いに高価なものでしたから、何かあったらどうしようとひやひやしたのは確かですよ。無事に船から降りてくれて、ほっとしました」

美味しそうな匂いとともにも最初の料理が運ばれて、三人はひとまず話を中断して食事に取りかかった。

まず並べられたのは山ほど野菜が盛られた一皿だ。赤、白、オレンジと見た目も鮮やかな根菜の他に、

新鮮な葉物もふんだんに盛られている。

何気なく葉物を一口嚙ったダンは眼を見張った。

美味い。

名前もわからない野菜だが、驚くほどの滋味だ。

眼を丸くしたまま他の種類の葉物を嚙ってみると、鮮烈な緑の香りが口いっぱい広がった。

ほのかな苦みと野菜本来の甘みがたまらない。

色とりどりの根菜類もびっくりするほど美味しい。

添えられている熱い魚介のソースがまた絶品で、ジャスミンも相手を崩している。

「——信じられないくらい美味しいな！」

「いくらでも食べられそうですね」

女性向けのヘルシー献立かと思いきや、かなりの量があった野菜があつという間に消えていく。

絶妙のタイミングで次の料理が運ばれてきた。

生姜の利いた豚肉を一口食べて、ダンは今度こそ唸った。いつも食べている生姜焼きとどう違うのか、

うまく説明はできない。しかし、いい豚肉とは本来こういう味がするのかとしみじみと実感させられる。

たかが昼食で——と言っては失礼だが、これほど感動させられるとは思わなかった。

ダンの眼の前で、型破りの大型夫婦も嬉々として料理を口に運んでいる。

「こいつあ美味しいな。甘すぎず辛すぎず、しつかり魚の味がするのに魚臭さもない」

「この麺もだ。どこにも海老は見えないが、海老の旨みはすばらしく濃厚に出ている」

父親よりも母親のほうが食欲旺盛おうせいなくらいなので、
ダンは苦笑して言ったものだ。

「よく食べますね」

父親が苦笑しながら同意する。

「それだけ食って、ちつとも太らないんだからな。運動量が半端ないせいかな」

「戦闘機乗りは体力が命なんだぞ」

真顔で言つて、ジャスミンはダンを見た。

「そうだ。船長。もしかしたら、近いうちに仕事を
お願いするかもしれない」

「わたしに？」

ダンに仕事の依頼と言つたら『荷物の輸送』だが、

わざわざ頼むのはおかしい。ジャスマインの夫は彼女曰く『共和宇宙一の船乗り』である。

ダンは不思議そうにケリーを見た。

「あなたの船は調整中ですか？」

「どこも何ともないぜ。少なくとも今はな」

ケリーが苦笑いして言えば、ジャスマインも何やら複雑な表情である。

「仕事自体は簡単だ。少なくとも今の話の絵よりはずつとな。——わたしを運んで欲しいんだ」

ダンは訝しげに瞬きした。

「《パラス・アテナ》が使えない理由は？」

「船がストライキを起こしてるのさ。いや、違うな。今はまだ起こしてないが……起こそうというか、間違いなく起こすだろうというか……」

「何なんです、いったい？」

ダンが戸惑ったのも無理はなかった。

いつも豪快すぎるくらい豪快な母親が、こんなに歯切れが悪いのは珍しい。

ジャスマインは困ったように広い肩をすくめた。

「行き先が少々問題なんだ。——惑星トゥルク」

途端、ダンはととてもとでも——とても！ いやな顔になって、きっぱりと言った。

「お断りします」

「そう言うな。もちろん正規の料金を払う。いや、何ならぼったくりの割り増し価格でいいぞ」

ダンはずっと顔をしかめた。

金の問題ではない。それはこの二人のほうがよく知っているはずである。

原始太陽系がそっくり跳躍してきたような光景は思いつきだけで身の毛がよだつのだ。

大仰に言うなら、危うく死ぬところだった。

命のある限り、二度とあの星には近付きたくない。そう思ったのは何もダンに限ったことではない。

先日の体験がよほど不愉快だったのか《パラス・アテナ》の感応頭脳が盛大に臍を曲げているらしい。

「あの星に降りるのはいやったら、いや！」

頑として譲らないというのだ。

宇宙船にあるまじき台詞であるが、ダンは大いにダイアナに同情した。

船に同情するというのも変な話だが、あの惑星が禁忌なのは船乗りの自分も同じことだ。

同じ船乗りのケリーはどうなのかと眼を向けると、やはり苦い顔である。

「俺もどっちかってえとダイアンの意見に賛成だな。できれば二度とあの星には降りたくない」

ジャスミンが夫に軽い非難の眼を向けた。

「その点はわたしもまったく同感なんだぞ。しかし……無下にお断りするわけにもいかないだろうが」

「わたしにわかるようにお願いします」

ダンの抗議はもつともだ。ジャスミンは少し声を低めて、慎重に言ったのである。

「まだ内定なんだが……ミスタ・ロムリスとミス・シノークがああ星の最高位の僧侶になるそうだ」

ダンもその二人にはトゥルークで会っている。

この両親と知り合いらしいということも知ったが、あの二人が最高位の僧侶になることと、母親が再びトゥルークを訪ねることに何のつながりがあるのか、理解しかねる顔のダンにケリーが説明した。

「この女王さまは意外に義理固くてな。友達の晴れ舞台なんだから、招待されたら顔を出さないわけにいかないっていうのさ」

「それが礼儀というものだろう。ダイアナだって、昔なじみに会えるんだ、あんなにいやがらなくてもいいのにな」

「昔なじみ？」

すると、ジャスミンが不意に顔を輝かせ、何やらとっておきの口調で囁いたのだ。

「いいものを見せてやろうか」

「……女王。ほんとに持ってきたのかよ」

これまた珍しくケリーがいやな顔をしている。何だろうと思ったらジャスミンが取り出したのは

写真だった。中心にケリーが写っている。今よりも

ずつと若い。二十代前半に見える姿だ。

他に数人の男が写っている。どれも皆、かなりの個性を感じさせる顔だ。

ジャスマンは店の喧噪けんそうに紛まぎれて、小聲で囁いた。

「隣となにいるのが銀星ぎんせいラナートだ」

ダンだんは耳を疑った。

「……本当ですか？」

「それだけじゃないぞ。これが龍ドラゴンのセルバンテス、ロス教授ロスけつじゆ、豪傑ごうけつアーヴィン、死神デス槍ランのルーク……」

噂うわさでしか知らなかった伝説の英雄たちの容貌ようぼうに、ダンの眼は釘付けになった。

アーヴィンは思っていた以上に豪放磊落ごうほうらいらくな風貌ふうぼうで、ロスは予想通り知的な印象の初老の男だ。ルークは想像よりずっと生身の人間らしい。セルバンテスは高級仕立ての背広を着こなす洒落者しゃれもので、ラナートとランバルトは男性モデルのような色男だ。

ジャックに至っては色白の女性的な容姿である。

こんな写真がまさか存在するとは思わなかった。

五十年前の警察・軍関係者が喉のどから手が出るほど欲したに違いないその写真を、ダンだんは息を呑のんで見つけていた。我に返ると、真剣な表情で、珍しくも母親におねだりをしたのである。

「——お母さん、この写真、複製してくれませんか。うちの連中にも決して口外はしませんから」

本心では大いに自慢したいところだが、言ったが最後、入手先を問いつめられるのは必至である。

「そう言うと思った」

ジャスマンは微笑して、ダンの手からその貴重な写真を取り上げた。

「残念ながら複製はできないんだ。現像した時からそういう特殊な加工がしてあるらしい。この写真を撮影することもできないそうだ」

ケリーが肩をすくめて言う。

「現にダイアンはこの写真を画像として見る事ができないんだぜ。ただの真つ黒な紙に見えるんだと。そんなものをよく後生大事に取つといたもんだ」

「五十五年もな。几帳きちょうめん面なダイアナにも捨てると言わなかったおまえにも感謝するぞ。——この写真人数分しか現像していないんだらう」

「そりゃあそうさ」

外見は三十そこそこのケリーが遠い昔を思い出す微笑を浮かべている。

「この当時もみんなおたずねものだけ。自分の顔をばらまきたいと思う奴はいねえだらうよ。まったく酔狂なおつさんだった」

誰のことを言っているのかとダンは不思議に思い、ジャスマンが感慨かんがい深げに言った。

「この写真を撮ったのはキャプテン・ランバルトだ。今でもこの男を若造呼ばわりだぞ。あれはさすがに驚いた。他の誰にも真似できない」

「あなたのことはお嬢呼ばわりじゃねえか」
またしても息を呑んだダンだった。

実を言うと、トゥルークから帰って以来、両親に訊ききたくて訊きたくてうずうずしていたことだから、

危かいうく快哉を叫びそうになって、慌あわてて抑えた。

「——特攻ランバルトに会ったんですか!？」

「ああ。至ってお元氣そうだったぞ」

ジャスマンが笑って言えば、ケリーがまたしても苦笑いの顔で言う。

「もういい歳だつてのに元氣すぎるおつさんだぜ」

好奇心にふくらみきつてダンは身を乗り出したが、ケリーは何故か言葉を濁にごして詳しく語ろうとはせず、代わりにジャスマンが困ったように笑ったものだ。

「ダイアナは《アルベルティーナ》と親しいらしい。昔を知る貴重な知り合いなんだ。この機会に旧交を温めてもいいのにな……」

宇宙船の感応頭脳同士が旧交を温めるとは聞いたこともないが、ダンはずますます身を乗り出した。

「まさか《アルベルティーナ》もダイアナのような意志を持つ感応頭脳を積んでいるんですか?」

「それはねえな。あれは違法な改変に改変を重ねて、ちよびつと態度がおかしくなつてただけだ」

ジャスミンがさかさず指摘する。

「ちよびつとで済むのか？ わたしの眼から見ても、かなりおかしかったぞ」

「おっさんが自分で言ったのさ。『あいつは俺以外誰も扱えない程度に変わってるだけだ』ってな」

「つまり、キャプテン以外の指示は聞かない？」

「ああ、そのはずだ。ダイアンみたいに乗員を外に放り出しこしなかったが、おっさん以外の人間は人間に見えてないようなところがあったぜ」

「それならダイアナも似たようなものだろう」

ジャスミンの疑問にケリーは首を振った。

「ダイアンの場合他の人間も人間とわかってるぜ。

——本来、自分に指示を出す資格がある生き物だとちゃんと知っていて、その上で技術ぎじゆつが足りないという理由でわざと無視するんだ」

自分がとんでもないことをしゃべっている自覚があるのかないのか、ケリーは感慨深げに続けた。

「それに比べるとあつちはなあ……下手へたをすると、

おっさん以外の人間には返事もしないぜ」

「感応頭脳が人間の呼びかけに答えない？」

覚えず唸ったダンだった。

船乗りとして超弩級ちやうぶきゅうに恐ろしい事態である。

ダンは辺境最速の船乗りとして自分の操船技術に自信を持っている。他の船乗りが危険だと判断して避ける航路でも、自分が行けると信じたら、多少の危険を承知して荒れた宙域に乗り出す覚悟もあるが、狂った感応頭脳に身を委ゆたねて宇宙を飛ぶ勇氣はない。それは勇氣ではなく、無謀だからだ。

「ティーナだけじゃねえ。グラランド・セヴンの船はみんなその程度には変わってたんだよ。——今でも稼働中つとところからしても、まあ、普通じゃねえな。耐用年数をとくに超えてる。乗り手もだが」

「そういうおまえはいっぺん死んでるぞ」

ジャスミンはからかうような口調で言った。

「キャプテンはおまえにとつても懐なつかしい人だろう。今のうちに昔話に花を咲かせておいたらどうだ？」

ケリーは何とも微妙な表情になった。

「……そこがなあ、何しろ次に会うのはあの世だと思つてたからな」

「いいじゃないか。ご夫婦の慶事なんだ。こちらも夫婦で出席しないと、さまにならないだろう」

「女王。俺はまだいいとして、問題はダイアンだけ長い付き合ひだが、あそこまで頑固にいやがるのは見た覚えがない。無理強いはできねえよ」

ジャスマンは困つたように頭を掻いた。

「そうだな。わたしもぎりぎりまで説得してみるが……どうしても無理なら船長に頼む」

渡航をいやがる船をなだめなくてはならないとは、妙な苦勞もあつたものだ。ダンは深く嘆息した。

「わたしとしてはダイアナがあなたの説得に応じてくれることを心から願いますよ」

三人がだいたい食事を終えた頃、店の扉が開いた。彼らは行列の最後について、彼らの後に店に入つて来た客は一人もいない。

食事をしてる間に、満席だった店内も、かなり

空席が目立つようになってる。

それは昼食の受付が終わつたことを示しているが、入つて来た人は微笑みながら遠慮がちに言つたのだ。

「——少し遅かつたかな？」

「とんでもない。どうぞ」

空席も多いのに、給仕係はその客をカウンターに案内している。

ケリーが何気なくその人を見て、眼を逸らした。

こんな時に誰もが無意識にやる自然な仕草だった。新たな客が入つて来たので反射的にそちらを見て、自動的に元の位置に眼を戻す。

どこもおかしくないが、ジャスマンは夫の様子に何かがあることに敏感に気づいた。

新たな客は高齢の男性だった。恐らく七十代だが、活力に満ちた、毅然とした姿である。仕立てのいい背広に身を包み、大きな手提げ鞆を持っていて、

その鞆も高級品と一目でわかる。この飲食店とは

ちよつと雰囲気を異にしている人だった。

ジャスマンはぎりぎりまで声を低めて尋ねた。

「——知り合いか？」

「知り合いといえは知り合いだ」

本人に聞こえないように、ケリーも小声で囁いた。

「昔はしょっちゅうパーティーで会った。シメオン・パラデューだよ」

「——あれが？」

経済界から四十年遠ざかっていたジャスマンでも、その名前は知っていた。頻繁ひんぱんに報道で見るからだ。

ダンも密かに驚いていた。

共和宇宙でも十指に入る高名な投資家が、秘書も連れずに一人で街中の飲食店を訪れているのである。彼の身分や立場を考えるとまずあり得ないことだ。それともパラデューは意外にこういう『お忍びの行動』を楽しむ性格なのかと思つた。

ジャスマンも同様の感想を抱き、揃つてケリーに眼をやつた。妻と息子の眼に浮かんでいる疑問に、

ケリーは無言で首を振つた。

ケリーの知る限りシメオン・パラデューは厳格で気むずかしく、間違つてもこんな庶民的な店を好む男ではなかつたからだ。

パラデューはもちろんケリーには気づかない。

彼の知っているケリーは今より遥はるかに歳を取つた姿だつたのだ。気づかなくて当然である。

「今日は何になさいます？」

「いつもと同じだよ。今日の昼食ランチが食べたんだけど、もう残つていないかな？」

「大丈夫です。星陵麵スターメードルがまだあります」

「ではそれを」

「はい。ヨハン！ パラデューさんの分、お願い」
給仕係が奥に声を掛けている。このやりとりから察するに、パラデューはこの店の常連のようだった。

ますます意外に思いながらも三人は大量の料理をようやく食べ終わり、食後の珈琲コーヒーを待つ間、ダンは先程感じた疑問を率直に訊いてみた。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。